

---

# 〔たこ焼き兄弟。〕

夕凧詩人

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

「たこ焼き兄弟。」

### 【Nコード】

N7800A

### 【作者名】

夕風詩人

### 【あらすじ】

どんなものにも心がある。仲の良いたこ焼き兄弟にスポットを当てた、ハートフルだったらいいなあ的小説。

## （前書き）

たこ焼きの話です。

たこ焼きを食べながら読むといっそ面白い・・・ことを祈ります。

ジュージュー……。  
カチャカチャ……クルツクルツ。  
ジュージュー……。

「へいお待ち！たこ焼き6個、100円ね！！」

「あつ、はい！じゃあこれで。」

「はいはい、100円ちょうどね！毎度あり！！」

……

上の方からそんな感じの音が聞こえてくる。

俺は……たこ焼きです。

名前は……たこ焼・き太郎（笑）

いやもう笑うつきやないよね？たこ焼きだぜ？太郎じゃなくてき太郎だぜ？妖怪かつーの。

まあ……笑おうにも口が無いんですけどね。

???『お兄ちゃん！何してんの？』

声の発信原は俺のいる場所の反対側。

き太郎『おお！たこ焼き兄弟の紅一点、普段はしつかりもので、お兄ちゃんの前でだけは甘えん坊になると言う定番の妹キャラ設定のたこ焼・き六子じゃないか！』

き六子『何でそんな説明的なの？つーかお兄ちゃんウゼエ』

えっ？あれ？甘えん坊キャラは？

き六子『てゆーかー、チョーうけるんですけど！マジウゼエ！アヒ

ヤヒヤヒヤヒヤ!」

作者さーん!設定ミスってますよー?妹ってこんなんじゃないっしょー?

????「兄さん!」

????「兄上!」

今度は後ろと左横から声がした。

き太郎「おお!いつも二人一緒のたこ焼・き次郎とたこ焼・き三郎じゃないか!どうしたんだそんなに慌てて」

き次郎「き四郎兄さんが・・・き四郎兄さんが・・・」

なっ何があつた!?まさか!?

き三郎「・・・食べられました。」

やはり・・・か。

「んー、たこ焼きおいしいー!」

「ウチのたこ焼きはどこにも負けねえよ!」

少女は六個入りだったたこ焼きの一つを食べ、残りを袋にしまった。

「お母さんにも食べさせて上げよーっと。」

き太郎「たこ焼・き四郎オオオオオオオ!!!」

俺は叫んだ。

まあ、口なんかないから声は出てないけど。

き次郎『兄さん！あの女・・・異常です！たこ焼きを真ん中から食べるなんて・・・』

落ち着け、き次郎。

き三郎『普通、右利きなら右端から、左利きなら左端からではないのですか！？それを・・・真ん中なんて・・・』

確かにその怒りももっともだ、だから落ち着け、青のりが頭から落ちてきてるぞ。

き三郎『むっ、失礼。それで兄上、これからどうします？』

どうするつてもなあ・・・蓋閉められちゃってるし、開いたところで食われてジ・エンドしかねえし。

き六子『てゆーかー、チョーダリインですけどー？』

き六子黙れ。

き次郎『そうだ、き五郎！おまえはどう思う？』

そついや、たこ焼き兄弟五男坊のたこ焼・き五郎は、まだ一回も喋ってないな、何を考えているんだ？

き五郎『・・・自分・・・たこ入ってませんから・・・』

太・次・三『・・・なんかごめん。』

「たっだいまー！お母さん、たこ焼き買ってきたから一緒に食べよー！」

「あら、お帰りゆり子。たこ焼きなんて気が利くわね」

ゆり子はたこ焼きを開け、机の上に置いた。

少し冷めたとはいえ、まだたこ焼きのソースが香る。

「ああ、辛抱たまらん!!!」

ゆり子は爪楊枝でたこ焼きの一つを刺し、口にほりこんだ。

「うーん、やっぱりおいし……ん?……あれ、これたこ入ってないや。」

き太郎『き五郎オオオオオオ!!!』

俺は叫んだ(本日2度目)。

まあ、やっぱり音にはならないけどね

き次郎『……まさか本当に……タコが入っていなかったなんて……き五郎……』

き三郎『兄上!もし私にもタコが入っていなかったら……どうすればいいんですか!?焼きですか!?たこ焼きにタコが入ってなかったら、焼きになるんですか!?焼・き三郎ですか!?』

落ち着けき三郎、かつお節が落ちるぞ。

き三郎『むっ、失礼。』

き次郎『きっ、き太郎兄さん!大変です!空に爪楊枝が!!!』

き太郎『なに!?やつら、温かいうちに食べるつもりか!?』

き三郎『あっ、兄上!!!爪楊枝が、爪楊枝がああ!!!』

ブスッ。

き太郎『きっ、き三郎オオオオオオ!!!』

き三郎『うわああああ!くっ、食われるううう!!!』

パクッ。

「あらっ、本当においしいわね。ちよつと冷めてるけど。」

「でしょー、１００円だったんだよ！安いよねー！」

「６個で１００円・・・安い・・・か？普通でしょ？」

「もうーお母さんってば！アハハッ！」

「ウフフッ」

「「ウハハハハッ」」

き太郎『き三郎オオオオオオオ！！！』

俺は叫ん・・・以下略。

き次郎『これで残ったのは僕とき六子と兄さんだけです・・・』

六個兄弟だった俺たちが、今では半分か・・・運命とは、残酷だな。

き次郎『兄さん・・・僕はこんな運命は受け入れられない！食われていった弟たちの為にも、僕は奴らに一矢報いてやる！！！』

なっ、何をするつもりだき次郎！？

き次郎『ウオオオオ！！！！』

き次郎の頭のかつお節が踊り狂っている！？まさかこの技は・・・

俺ですら習得できなかった伝説の奥義・・・

き次郎『ハアアア！！！！奥義！《発熱》！！！！』

き太郎『きっ、き次ろおおおおお！！！！』



「次はこれ食べよーつと」

ゆり子は爪楊枝をたこ焼きに刺し、口に運んだ。

「んっ？んー！ーっ！ー！！ホホアホホア！！！！（訳：お茶あおお茶あ！！！！）」

「ほらゆり子、はいお茶！まったく、情けないんだから！」

「プツハッ！ー！！！！いやーまさか冷めてないたこ焼きがあつたなんてさ、舌火傷しちゃったよ」

ゆり子はそう語りながら、たこ焼きをお茶で胃へと流し込んだ。

き太郎『き次郎・・・立派だった、ここはやはり、この兄も後に続かねばな・・・！』

俺は叫ばずに、ありえないくらいかつこいい顔で、空を見上げた。青空が目染みるぜ！みたいな顔もしてみた。

ええまあ、ご察しの通りたこ焼きに表情もへつたくれもありませんがね。

き六子『お兄ちゃん・・・みんな食べられちゃったの？』

き太郎『き六子・・・何でこのタイミングで本来の妹キャラに戻るんだ？』

き六子『お兄ちゃん！！空に爪楊枝が・・・2本も！！！！』  
えっ？無視？

まあ、いいや、今はそんな場合じゃ無さそうなので精一杯焦るか。  
き太郎『なっ、なにい！！？くっ、奴ら、同時に二つ食うつもりか  
！！！！』

き六子『お兄ちゃん・・・このままじゃ食べられちゃうよ・・・』

俺は視線を（目なんて無いけど）き六子に向けた。

き太郎『き六子、俺たちたこ焼き兄弟は食われるために生まれた・  
・確かに食われるのは恐い、しかし、食われるということは幸せで  
もあるのだ！それを理解しなさい・・・』

き六子『お兄ちゃん・・・』

き太郎『き六・・・』

ブスウツ！！！！

き太郎『グアアツ！！！！つつ爪楊枝が・・・俺の頭頂部にい・・・  
しかも2本ともお・・・』

き六子『お兄ちゃあああぁん！！！！』

き太郎『き六子！！兄の食われっぷりとくとも見るのだ！！！！』

「あらあら、おいしそうだね」

「ちよっとお母さん！たこ焼きに爪楊枝を刺したまま持ってたら落  
としちゃうよ？」

「大丈夫よ、2本も刺してんだから。だいたい、いくら母さんが年  
だからってそんなドジ踏むわけ・・・あっ！！！！」

「ああ！！！！」

ポトツ。

「お母さんだから言っただでしょう！？早く拾わないと！！3秒ル  
ルよ！！」

「わっ、わかってるわよ！早く拾わないと・・・ああっ！！！」  
「ああっ！！！」

母親の体がバランスを崩し、姿勢制御の為に床に手をついた。  
グニャッ。

母親の手の下から嫌な感触。

手を上げたそこには・・・潰れたたこ焼きがあつたそうなの・・・。

き六子『お兄ちゃああん！！』

「もっっ！お母さんてば」

「悪かったって思ってるよ、そんなに怒らないでくれ」  
母親が潰れたたこ焼きを台所へ捨てに席を立つ。

「むううゝたこ焼きもあと一個か・・・」

「おおゝい！父さん帰ったぞゝい！ヒックッ！」

「あっ！お父さんってば酔ってる！！お酒飲んで帰ってきたわね！？」

「おお！TAKOYAKI（たこ焼き）じゃないか！！」  
ヒョイツ

「あっ！ちよっ、お父さ・・・」  
パクッ！

き六子『ギャー！ー！ー！ー！オヤジに食われるうう！ー！ー！』

ムシャムシャ。

「んー！ー！んまい！ー！よし！今夜はTAKOYAKI（たこ焼き）だあ！ー！ー！」

「もー！ー、お父さんてば、読みにくいローマ字表記なんてしちゃって、アハハッ！」

「ワハハッ」

いつのまにか母親が帰ってきている。

「ウフフッ」

「「「アウワハハハッ」「」」」

その日、ゆり子の家族は笑顔に包まれて穏やかに過ごしましたとさ・・・。

余談だが、その日のゆり子宅の夕食は、たこ焼きではなくお好み焼きだったそうなの・・・。

T  
H  
E  
•  
E  
N  
D

（後書き）

ちなみにこの話で出たゆり子は『勇者の話。』の使いまわし・・・  
もとい、友情出演・・・なんか違うな？  
んゝ・・・じゃ、リサイクルで。  
そんな感じです（オイ）。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7800a/>

---

〔たこ焼き兄弟。〕

2011年1月30日02時45分発行